

# 親鸞における宋代浄土教受容について

堀 祐 彰

『教行証文類』への宋代浄土教典籍の引用は全体で三十一文あり、その中、元照、或いは元照の弟子の釈文の引用は二十文もある。そこで、元照浄土教引用の意義を窺うと、ま

ず、善導浄土教の投影が所々に見られることである。即ち、

(一) 元照の『観経義疏』の第二撰教分齊において、一代仏教を娑婆入道の教観と浄土往生の教観とに分け、『観経』に示される浄土往生の教観が弥陀教円頓一仏乘法、大乘了義中の了義法として依るべき教法なることを強調している。

(二) 同じく『観経義疏』において、『観経』の九品往生人の地位に関し、善導の説を全面的に依用(善導が「玄義分」に上文顕証した十文を全引)して、九品唯凡説を主張している。

(三) 元照の『弥陀経義疏』において、善導をうけて、十念を十声の称名と解し、十念称名念仏による悪人往生を主張している。

(四) 善導の『往生礼讃』をうけて、称名による浄土往生を主張している。

等、善導浄土教をうけている箇所が見られる。また、賢愚、道俗、修行の久近、罪の重軽等を簡ばない大悲願力による浄土念仏往生を勧められること、布施・持戒等の余善を少善根とし、称名を多善根多福德とする立場は、法然の主張に近い。また、名号の超勝性を顕すために全徳施名的な記述をし、その万徳により滅罪するということは、親鸞の主張をうけており、法然・親鸞の主張に近いと言えよう。つまり、元照浄土教は教義的に善導浄土教に近いということより、元照浄土教を主とした宋代浄土教典籍の引用があると言えよう。

次に、宋代浄土教典籍の引用と法然批判への反論との関係について窺っていくことにする。『泉涌寺不可棄法師伝』や『三国仏教伝通縁起』等によると、泉涌寺の俊仍は、宋代浄土教関係の文献、とりわけ元照系の浄土教関係の文献を宋より日本へ持ち帰ったとしている。そのことは、俊仍が入宋し

親鸞における宋代浄土教受容について（堀）

て南山律元照の系統の如庵了宏に律を学んでいることから明らかになるであろう。そこで、親鸞は『教行証文類』に宋代浄土教の典籍を引用することによって、当時、激しく法然批判をしていた南都仏教（南京律の立場）に対して、鎌倉期におけるもう一つの戒律興隆運動を展開した俊苾系浄土教の立場（北京律）である元照浄土教の典籍を引用し、反論していったものと思われる。そこで、『教行証文類』における宋代浄土教典籍の引用部分について窺っていくことにする。

まず、「行文類」大行釈では、名号大行の徳を示し、称名念仏の価値の絶対性を強調している。貞慶・高弁は、法然の立場、つまり、偏依善導を基本的立場とし専修念仏を主張する立場を批判する。即ち、善導の根本的立場は観念為本であるし、念仏は下機誘引の方便とし、観勝称劣であるとす。

これに対して、親鸞は大行釈下に、善導の積文等を引用して、善導は念仏為本が根本的立場であるとす。さらに、これらの善導の積文の後に宋代浄土教の典籍を引用することによって、名号大行の性格を強調していかれる。即ち、大行（称名）には勝（滅罪・護持）と易（機類を簡はず）の二徳があり、それは、名号に無量の功徳が摂められているからであり、従ってそれを称える所の称名にも無量の益があることを顕していかれる。以上の如く、教義的に善導浄土教の投影が所々に見られる宋代浄土教を引用し、善導の積文の助顯とす

ることによって、法然・親鸞の善導理解、更には親鸞の名号大行説の正当性を立証されているのである。

次に、「化身土文類」真門釈では、法然・親鸞の言っている念仏は自力念仏ではないことを強調している。即ち、貞慶や高弁は法然の言う所の念仏は口称の行であり、三昧発得の方便と解していた。それに対し親鸞は、自力行である真門念仏を方便行とすることによって、法然・親鸞の言っている念仏は観念念仏より劣った口称念仏ではないことを示していかれる。つまり、親鸞は、大行釈下において、称名の益の無量なることは、願生行者の功ではなく、名号に摂せられている万徳によるということを顕し、弘願他力の念仏を明かしている。元照自身も『観経義疏』や『弥陀経義疏』において、他力をたのむことを示している。従って、真門釈においても元照の積文等を引用することによって、念仏行における自力・他力の分別を明確にしているのである。つまり、この真門釈に引用されている元照等の積文は真門念仏の義に解することができるものであり、同義の善導の積文の助顯をし、真仮の分別を明確にしているのである。以上の如く、この箇所においても宋代浄土教の典籍を引用することによって、法然・親鸞の善導理解、更には親鸞の念仏観の正当性を立証されているのである。

また、「信文類」菩提心釈では、法然の菩提心否定に対す

る高弁よりの批判に対し、親鸞は菩提心積下で信樂即菩提心の義を展開してその論難に答えている。この箇所引用された宋代浄土教の典籍は、弘願法の難信なることを示すことによつて、横超の菩提心（大信）の超勝性を顕し、具縛の凡愚といえども、願力廻向の信心（菩提心）によつて、往生成仏し得ることを証している。

同じく「信文類」真仏弟子積では、その形成の背景として、貞慶・高弁は戒律を重視し、釈迦仏への復帰、釈尊の真仏弟子たる自覚、第二の釈迦として弥勒信仰に生きていくのであり、かかる立場より法然の弥勒信仰への批判がなされている。これに対し、親鸞は真仏弟子積において、念仏の行者こそが真の仏弟子であるとして、便同弥勒説を展開して反論されているのである。この引証として宋代浄土教典籍の引用がある。即ち、親鸞は宋代浄土教の引用によつて、弥勒信仰に対し、弥勒信仰の普遍性、超勝性を示し、真の仏弟子は弥勒と同じ利益を得る念仏の行者であることを証されている。このように、真仏弟子積は貞慶・高弁の主張に対し、横超の金剛心を具足せる弘願の行者こそが真の仏弟子であり、弥勒と便同であるという説を展開することによつて、法然・親鸞の主張する念仏法門の正当性を論証されているのである。

以上の如く、宋代浄土教の典籍の引用は主として上の四箇所である。即ち、それらの引文は各々、法然批判に対して反

論すべき箇所にあたり、実に反論の引証としての役割を果たしている。即ち、法然・親鸞の善導理解の正当性を証明するために宋代浄土教の典籍の引用が存するのである。それは、法然の善導理解の不当性を指摘した貞慶・高弁に対し、善導の釈文の助頭として宋代浄土教の典籍を引用し、法然・親鸞の善導理解、更には親鸞の浄土教観の正当性を立証していかれたと思われる。また、宋代浄土教典籍の引用中、元照浄土教関係の引文が多くを占めていることには、元照浄土教には善導浄土教の影響が所々に見られるということ、また、法然批判を展開した主たる立場である南京律に対する北京律の立場として、俊苒系浄土教、即ち、元照浄土教を用いたということが言えよう。以上の如く、親鸞における宋代浄土教の受容は、貞慶・高弁等における法然批判に対する反論の引証という意義が存するということが言えると思われる。

〈キーワード〉 元照、宋代浄土教、『教行証文類』

（龍谷大学大学院）